

Lettre du Voyant 研究序説

奥本大三郎

A Propos de la «Lettre du Voyant»

Daisaburo OKUMOTO*

LÉSUMÉ

Le 13 mai 1871, Jean-Arthur Rimbaud, âgé de dix-sept ans, adresse une lettre à Georges Izambard, le 15 mai, une autre à Paul Demeny, dite du Voyant. On y trouve une éclosion brusque de sa pensée poétique.

Après avoir exposé le système de voyance, Rimbaud critique les poètes et la poésie de l'Occident depuis les temps anciens jusqu'à l'époque romantique. Il condamne Musset et, par contre, il témoigne d'une admiration exceptionnelle pour Baudelaire. (Musset est quatorze fois exécration pour nous, générations douloureuses, et prises de visions. etc....Baudelaire est le premier voyant, roi des poètes, *un vrai Dieu*.) Entre le malheureux Musset et Baudelaire se trouvent beaucoup de poètes "mineurs" comme Léon Dierx, Albert Méral, François Coppée etc. ainsi que les grands noms comme Hugo, Lamartine, Gautier etc.

Etant donné que Rimbaud était une sorte de génie de pastiche il est très intéressant, à notre avis, de chercher les sources des mots clef et les idées rimbaldiennes dans les ouvrages de ses prédécesseurs.

Dans cet article nous avons donc essayé d'analyser ces deux lettres et de connaître les rapports entre Rimbaud et les autres poètes dont il parle. Cet effort nous servira beaucoup à comprendre la doctrine du Voyant et les œuvres rimbaldiennes.

目 次

I. まえがき

II. テクストおよびその試訳

- i) 一八七一年五月(十三日)付, Georges Izambard 宛書簡
- ii) 一八七一年五月十五日付, Paul Demeny 宛書簡 (「見者の手紙」)

III. 書簡原稿の再発見とその公刊

- i) 五月(十三日)付, Izambard 宛
- ii) 「見者の手紙」

* フランス語教室 (Dept. of French)

- IV. 当時の社会、政治状況と Rimbaud 自身の置かれていた位置, Izambard, Demyen その他 Rimbaud 周辺の人物について
- V. 「見者の手紙」に現われる数々の詩人について, またそれらの詩人たちと Rimbaud との関係について
- VI. 「見者の理論」について
- i) 「見者」という語の源泉
 - ii) Rimbaud における Voyant の意味
- VII. 「見者の手紙」を境として見た場合の Rimbaud の詩の変化
- VIII. 結 論

I. ま え が き

「見者の手紙」とは、アルテュール・ランボオが、一八七一年五月十五日に、その先輩格の詩人、ポオル・ドメニィに宛てて書いたものであって、その中に見える「見者」(Voyant) という言葉から、このような名がある。ランボオはまた、その二日前、五月十三日に既に、高等中学時代の自分の先生であったジョルジュ・イザンバールに、これと同趣旨の、しかしより簡略な手紙を書いており、拙論はこの二通の手紙について論じるものである²⁾。

ランボオの詩句は、簡潔で力強いが、同時に省略が多く、短く切れば、神託か予言者の言葉のように、様々な意味にとれることがある。批評家、研究者の中には、ランボオの詩句を断片的に引用して、自分の宇宙の中に引き入れ、独自の解釈をほどこす人もいないではない。しかし、そうしたいわば創作的批評とは別に、詩人、小説家が意図したところから出来るだけ忠実に作品を読もうと試みることは、読者の基本的な一つの態度であり、かつ一つの理想である。ところでランボオの書いたものは既にほぼ百年の歳月を経過して、我々の時代の常識、あるいは感覚でそのまま読むことは難しく、また危険でもある。およそ説明的要素というものを欠いた彼の文章の難解さに加えて、彼の生活そのものが、いわゆる文壇づきあいとは無縁なものであって、他の詩人、文人の証言をほとんどもたぬ、謎につつまれたものである。わずかに、学校時代の彼の先生、級友とヴェルレーヌそのほか少数の人々が、彼について書き遺しているが、それがときによると意識的な歪曲を含んでいて、そのまま鵜呑みにできないものなのである。ランボオについては数々の伝説——というよりは「神話」が語りつがれてきた。たとえばその才能の絶頂期に文学を放棄し、アフリカの砂漠で鉄砲などを扱う商人となったこととか、一八七一年にはパリコンミューンに参加したかもしれない等のことである。これが、彼の作品そのものよりも、その物語風の伝記の方が一般の関心を惹く所以である。従って我々としては、ランボオの詩句を読み、理解し、彼の人生を識るための手がかり、いわば一等資料として、彼の書簡を尊ぶことになる。

ランボオは、三十七年の生涯の中に二百通余りの手紙を書いたと推定されるが、その中多少とも文学に関りのあるものは、一八七〇年五月から七三年にかけてのものに限られる。七四年の彼の手紙は一通も遺っておらず、その次は七五年三月五日付、シュトゥットガルト発のものであるが、その文面からは、詩を棄て、「猛烈な勢いで語学に精を出している」ランボオ、わざわざ訪ねてきた旧友ヴェルレーヌを相手にせず、新しい人生の方に向き直っているようなランボオの姿が伺われる。これに関してイヴ・ボンヌフォワも次のように言っている——詩というものは、一つの国語を絶対視することによってしかつくられぬものであって、ランボオがドイツ語、イタリア語、ロシア語、そして後にはアラビア語その他の外国語に熱心にとり組んだことは、決定的な詩の放棄の一つの徴候である。

さて、それらの文学書簡の中でも、一八七一年五月十三日、十五日付の二通はランボオの、詩についての考えを知る上で、とりわけ重要なものである。「僕は思想の開花に臨んでいる」と彼は言う。この二通の手紙の内容を大雑把に要約すれば次のようになるだろう。

- 1° ランボオ自身の立場の表明——詩人としての自覚
- 2° ランボオが当時書いていた詩
- 3° 古代から「現代」までの詩、および詩人に対するランボオの批判
- 4° 「見者」の理論あるいは詩法

これら二通の手紙に関しては、これまでに数々の研究があり、殊に 4° については、様々な解釈が組み立てられている。「見者」の思想をきわめて神秘的なもの、または術学的なものに見なして、その源泉を涯しもなく遠くまで探す者がある。ところが 3° の部分についての研究は比較的少く、手薄なのである。そうして、この部分には、現在でも名のある大詩人らと共に、今日殆んど忘れ去られてしまった当時の流行詩人や「群小詩人」らの名が多数見られ、ランボオが、パリを中心として展開されていた文学活動の状況に並々ならぬ関心を寄せ、新聞、雑誌、新刊書に、常に目を光らせていたことがわかる。(こうした彼の関心は、たとえばドメニー宛七一年四月十七日付の手紙にもよく表われている。彼はその二月末から三月初めまで、敗戦下のパリをうろつき、書店をまわって新刊書を細かく調べている。芸術書房 (Librairie Artistique) というところでは、共和派の詩人ウジェーヌ・ヴェルメルシュ (Eugène Vermersch) の住所を調べたりしているが、そのランボオの意図について、我々は様々なことを想像させられるのである。) また、ランボオの、当時の詩をつぶさに読んでみるならば、彼が、ボオドレールなどからとともに、これら群小詩人のある者から、借りたり、もじったり、盗んだりしている部分が意外に多い事がわかるのである、従ってこれらの詩人の影響をも含めて、当時のランボオをとりまく状況を識り、この二通の手紙をその中に据えて読むというのが、筆者の方針であり、ひいてはそれが、「見者の思想」解釈の鍵を提供し、また後期のランボオの、より難解な詩句を読むための手がかりとなると考えるのである。ただしそのためには当時の雑誌、新聞等を含む刊行物に系統的に目を通す必要があり、以下に“序説”としてまとめた小論は、もとより管見にすぎない。

III. テクストおよびその試訳

i) 一八七一年五月（十三日）付 Georges Izambard 宛書簡

Charleville, (13) mai 1817.

Cher Monsieur!

Vous revoilà professeur. On se doit à la Société, m'avez-vous dit; vous faites partie des corps enseignants: vous roulez dans la bonne ornière. — Moi aussi, je suis le principe: je me fais cyniquement *entretenir*; je déterre d'anciens imbéciles de collègue: tout ce que je puis inventer de bête, de sale, de mauvais, en action et en paroles, je le leur livre: on me paie en bocks et en filles. *Stat mater dolorosa, dum pendet filius.* — Je me dois à la Société, c'est juste, — et j'ai raison. — Vous aussi, vous avez raison, pour aujourd'hui. Au fond, vous ne voyez en votre principe que poésie subjective: votre obstination à regagner le râtelier universitaire — pardon! — le prouve. Mais vous finirez toujours comme un satisfait qui n'a rein fait, n'ayant rein voulu faire. Sans compter que votre poésie subjective sera toujours horriblement fadasse. Un jour, j'espère, — bien d'autres espèrent la même chose, — je verrai dans votre principe la poésie objective, je la verrai plus sincèrement que vous ne le feriez! — Je serai un travailleur: c'est l'idée qui me retient quand les colères folles me poussent vers la bataille de Paris, — où tant de travailleurs meurent pourtant encore tandis que je vous écris! Travailler maintenant, jamais, je suis en grève.

Maintenant, je m'encrapule le plus possible. Pourquoi? Je veux être poète, et je travaille à me rendre *Voyant*: vous ne comprendrez pas du tout, et je ne saurais presque vous expliquer. Il s'agit d'arriver à l'inconnu par le dérèglement de *tous les sens*. Les souffrances sont énormes, mais il faut être fort, être né poète, et je me suis reconnu poète. Ce n'est pas du tout ma faute. C'est faux de dire: Je pense. On devrait dire: On me pense. Pardon du jeu de mots.

Il est un autre. Tant pis pour le bois qui se trouve violon, et Nargue aux inconscients, qui ergotent sur ce qu'ils ignorent tout à fait!

Vous n'êtes pas *Enseignant* pour moi. Je vous donne ceci: est-ce de la satire, comme vous diriez? Est-ce de la poésie? C'est de la fantaisie, toujours. — Mais, je vous en supplie, ne soulignez ni du crayon, ni trop de la pensée:

LE CŒUR SUPPLICIÉ

MON triste cœur bave à la poupe,
Mon cœur est plein de caporal!
Ils y lancent des jets de soupe,
Mon triste cœur bave à la poupe:
Sous les quolibets de la troupe
Qui lance un rire général,
Mon triste cœur bave à la poupe,
Mon cœur est plein de caporal!

Ithyphalliques et pioupiesques
Leurs insultes l'ont dépravé!
A la vesprée, ils font des fresques
Ithyphalliques et pioupisques.
O flots abracadabrantesques,
Prenez mon cœur, qu'il soit sauvé!
Ithyphalliques et pioupiesques
Leurs quolibets l'ont dépravé!

Quand ils auront tari leurs chiques,
Comment agir, ô cœur volé?
Ce seront des refrains bachiques
Quand ils auront tari leurs chiques:
J'aurai des sursauts stomachiques,
Si mon cœur triste est ravalé
Quand ils auront tari leurs chiques
Comment agir, ô cœur volé?

Mai 1871.

Ça ne veut pas rien dire.—RÉPONDEZ-MOI: chez M. Deverrière, pour A. R.
Bonjour de cœur,

AR. RIMBAUD.

Monsieur Geogres Izambard,
27, rue de l'Abbaye-des-Champs,

À Douai (Nord).

シャルルヴィルにて、一八七一年五月（十三日）

先生!

また教師にお成りですね! 人は「社会」に尽すべき義務がある、と先生は僕に言われました。そして貴方は体制側に属していらっしゃる、出世街道をたどっておられますね。——僕の方もその原則に従ってやっています。つまり破廉恥に養われているわけなのです。学校時代の愚図連中をひっぱり出してきては、思いつく限りの、馬鹿々々しい、汚い、けしからんことを奴らに言ってやり、やってやります。そういうことを奴らに売渡してやるのです。すると、その代償にビールや葡萄酒で支払ってくれるという次第です。「人ノ子十字架ニカカリ、母悲嘆ニクレテ立尽シヌ」——僕が「社会」のために尽さねばならない、それはそのとうりです——でも僕も正しいのです。——貴方もまた正しい、今のところは。実際には、貴方は御自分の原理として主観的な詩だけしか見ておられません。再び大学の祿を食もうという貴方の執着が——失礼! ——それを証明しています。そして貴方は、結局のところ、何もしなかった、何もしたいと思わなかったから、と満足している人みたいになってしまうでしょう。貴方の主観的な詩が、いつもいつも嫌になるほど味気ないだろうということは勘定に入れなくてもね。そのうち、そうあればいいと僕は思っているのですが、——他にも沢山同じように考えているのがいるんです、——僕は貴方の原理の中に客観的な詩を見いだすことでしょ、——僕は貴方御自身よりもずっと真剣にそれを見ることでしょ! 僕は労働者になるつもりです。狂おしいばかりの怒りが、パリでの戦闘へと僕をかりたてるとき、僕をひきとめているのはこの考えなのです——あちらでは沢山の労働者らが、僕がこうして貴方に手紙なぞ書いている今もなお続々と死んでゆくのですが! 今働くことなんて、断じて否です。僕は今ストライキ中です。

僕は今、一生懸命放蕩に耽っています。どうしてだと思いませんか? 僕は詩人になりたい、だから自分を「見者」にするために苦心しているのです。貴方には全然お解りにならないでしょう、それに僕の方も貴方にどう説明したらよいか、殆んど説明に窮します。あらゆる感覚の錯乱によって未知に達する事が肝要なのです。苦痛は絶大です、しかし強くなければならず、生れつきの詩人でなければなりません、そして僕は、自分が詩人であることを悟ったのです。これは全然僕の責任じゃありません。「我思う」というのは嘘です、こう言わなければなりません「人我を思う」と。——言葉の遊戯のようですが。

「我」とは一個の他人なのです。木材が気のついたときにはヴァイオリンになっていたとしても仕方のない事です。無意識人間は勝手にしろ! です。そんなのは自分の全然知らんことに口を出す手合いです。

貴方は僕にとって教授者じゃありません。次の詩を差し上げます。あなたのおっしゃるだろうようにこれは諷刺でしょうか。詩でしょうか。幻想です、相変らずの。——でもお願いですから、鉛筆で線を引いてみたり、あまり考えこんだりしないで下さい。

責苦の心臓

僕のみじめな心臓が臚ともでよだれをたれている、
 僕のころは兵隊煙草でいっぱいなんだ！
 奴らはそこにジャーッとめしをぶちまける、
 僕のみじめな心臓が臚でよだれをたれている。
 みんなをどっと笑わせる
 兵隊流の悪巫山戯、
 僕のみじめな心臓が臚でよだれをたれている、
 僕のころは兵隊煙草でいっぱいなんだ！

弾痕々々歩兵助兵

あんな手合いに弄なられて僕のころが墮落した！
 夕されば、奴らはな壁画を描きあげる
 弾痕々々歩兵助兵。
 ああアブラカダブラ海の波、
 僕の心臓を取ってくれ、そいつが救われますように！
 弾痕々々歩兵助兵
 あんな手合いに弄られて僕のころが墮落した！

連中が煙草をきらしたら、
 なんとしよう、ああ盗難の心臓よ？
 酔っぱらいくどくど繰り返し
 連中が煙草をきらしたら——
 嘔吐が胸にこみあげるだろう、
えずきもしも僕のみじめな心臓がもう一度もとへ呑みこまれたら——
 連中が煙草をきらしたら
 なんとしよう、ああ盗難の心臓よ？

一八七一年五月

これは全く何のことでもありません。返事を下さい。ドゥヴリエール方、A.R. 宛。
 心をこめて、

A. R. ランボオ

ジョルジュ・イザンバール先生
 ドゥエ (ノール)
 アペイ・デ・シャン街 27 番地

- ii) 一八七一年五月十五日付 Daul Demeny 宛書簡
 (「見者の手紙」)

Charleville, 15, mai 1871.

J'ai résolu de vous donner une heure de littérature nouvelle; je commence de suite par un psaume d'actualité:

CHANT DE GUERRE PARISIEN

LE Printemps est évident, car
 Du cœur des Propriétés vertes,
 Le vol de Thiers et de Picard
 Tient ses splendeurs grandes ouvertes!

O Mai! quels délirants culs-nus!
 Sèvres, Meudon, Bagneux, Asnières,
 Écoutez donc les bienvenus
 Semer les choses printanières!

Ils ont schako, sabre et tam-tam,
 Non la vieille boîte à bougies,
 Et des yoles qui n'ont jam, jam...
 Fendent le lac aux eaux rougies!

Plus que jamais nous bambochons
 Quand arrivent sur nos tanières
 Crouler les jaunes cabochons
 Dans des aubes particulières!

Thiers et Picard sont des Éros,
 Des enleveurs d'héliotropes,
 Au pétrole ils font des Corots:
 Voici hannetonner leurs tropes...

Ils sont familers du Grand Truc!...
 Et couché dans les glaïeuls, Favre
 Fait son cillement aqueduc,
 Et ses reniflements à poivre!

La grand'ville a le pavé chaud,
Malgré vos douches de pétrole,
Et décidément, il nous faut
Vous secouer dans votre rôle...

Et les Ruraux qui se prélassent
Dans de longs accroupissements,
Entendront des rameaux qui cassent
Parmi les rouges froissements!

A. RIMBAUD.

— Voici de la prose sur l'avenir de la poésie:—

Toute poésie antique aboutit à la poésie grecque, Vie harmonieuse.— De la Grèce au mouvement romantique, — moyen âge, — il y a des lettrés, des versificateurs. D'Ennius à Théroldus, de Théroldus à Casimir Delavigne, tout est prose rimée, un jeu, avachissement et gloire d'innombrables générations idiotes: Racine est le pur, le fort, le grand. — On eût soufflé sur ses rimes, brouillé ses hémistiches, que le Divin Sot serait aujourd'hui aussi ignoré que le premier venu auteur d'*Origines*. — Après Racine, le jeu moisit. Il a duré deux mille ans!

Ni plaisanterie, ni paradoxe. La raison m'inspire plus de certitudes sur le sujet que n'aurait jamais eu de colères un Jeune-France. Du reste, libre aux *nonveaux* ! d'exéquer les ancêtres: on est chez soi et l'on a le temps.

On n'a jamais bien jugé le romantisme. Qui l'aurait jugé? les critiques!! Les romantiques? qui prouvent si bien que la chanson est si peu souvent l'œuvre, c'est à-dire la pensée chantée *et comprise* du chanteur?

Car JE est un autre. Si le cuivre s'éveille clairon, il n'y a rien de sa faute. Cela m'est évident: j'assiste à l'éclosion de ma pensée: je la regarde, je l'écoute: je lance un coup d'archet: la symphonie fait son remuement dans les profondeurs, ou vient d'un bond sur la scène.

Si les vieux imbéciles n'avaient pas trouvé du Moi que la signification fausse, nous n'aurions pas à balayer ces millions de squelettes qui, depuis un temps infini, ont accumulé les produits de leur intelligence borgnesse, en s'en clamant les auteurs!

En Grèce, ai-je dit, vers et lyres *rhythmment l'Action*. Après, musique et rimes sont jeux, délassements. L'étude de ce passé charme les curieux:

plusieurs s'éjouissent à renouveler ces antiquités: — c'est pour eux. L'intelligence uiverselle a toujours jeté ses idées naturellement; les hommes ramassaient une partie de ces fruits du cerveau: on agissait par, on en écrivait des livres: telle allait la marche, l'homme ne se travaillant pas, n'étant pas encore éveillé, ou pas encore dans la plénitude du grand songe. Des fonctionnaires, des écrivains: auteur, créateur, poète, cet homme n'a jamais existé!

La première étude de l'homme qui veut être poète est sa propre connaissance, entière; il cherche son âme, il l'inspecte, il la tente, l'apprend. Dès qu'il la sait, il doit la cultiver; cela semble simple: en tout cerveau s'accomplit un développement naturel; tant d'*égoïstes* se proclament auteurs; il en est bien d'autres qui s'attribuent leur progrès intellectuel! — Mais il s'agit de faire l'âme monstrueuse: à l'instar des comprachicos, quoi! Imaginez un homme s'implantant et se cultivant des verrues sur le visage.

Je dis qu'il faut être *voyant*, se faire *voyant*.

Le Poète se fait *voyant* par un long, immense et raisonné *dérèglement de tous les sens*. Toutes les formes d'amour, de souffrance, de folie; il cherche lui-même, il épuise en lui tous les poisons, pour n'en garder que les quintessences. Ineffable torture où il a besoin de toute la foi, de toute la force sur-humaine, où il devient entre tous le grand malade, le grand criminel, le grand maudit, — et le suprême Savant! — Car il arrive à l'*inconnu*! Puisqu'il a cultivé son âme, déjà riche, plus qu'aucun! Il arrive à l'inconnu, et quand, affolé, il finirait par perdre l'intelligence de ses visions, il les a vues! Qu'il crève dans son bondissement par les choses inouïes et innommables: viendront d'autres horribles travailleurs; ils commenceront par les horizons où l'autre s'est affaissé!

— la suite à six minutes —

Ici j'intercale un second psalme, *hors du texte*: veuillez tendre une oreille complaisante, — et tout le monde sera charmé. — J'ai l'archet en main, je commence:

MES PETITES AMOUREUSES

Un hydrolat lacrymal lave

Les cieux vert-chou:

Sous l'arbre tendronnier qui bave,

Vos caoutchouc

Blancs de lunes particulières
Aux pialats ronds,
Entrechoquez vos genouillères,
Mes laiderons!

Nous nous aimions à cette époque,
Bleu laideron!
On mangeait des œufs à la coque
Et du mouron!

Un soir, tu me sacras poète,
Blond laideron:
Descends ici, que je te fouette
En mon giron;

J'ai dégueulé ta bandoline,
Noir laideron;
Tu couperais ma mandoline
Au fil du front.

Pouah! mes salives desséchées,
Roux laideron,
Infectent encor les tranchées
De ton sein rond!

O mes petites amoureuses,
Que je vous hais!
Plaquez de fouffes douloureuses
Vos tétons laids!

Piétinez mes vieilles terrins
De sentiment;
— Hop donc! soyez-moi ballerines
Pour un moment!...

Vos omoplates se déboîtent,

Ômes amours!
 Une étoile à vos reins qui boitent
 Tournez vos tours!

Et c'est pourtant pour ces éclanches
 Qui j'ai rimé!
 Je voudrais vous casser les hanches
 D'avoir aimé!

Fade amas d'étoiles ratées,
 Comblez les coins!
 — Vous créverez en Dieu, bâties
 D'ignobles soins!

Sous les lunes particulières
 Aux pialats ronds,
 Entrechoquez vos genouillères,
 Mes laiderons!

A. R.

Voilà. Et remarquez bien que, si je ne craignais de vous faire déboursier plus de 60 c. de port, — moi pauvre effaré qui, depuis sept mois, n'ai pas tenu un seul rond de bronze! — je vous livrerais encore mes *Amants de Paris*, cent hexamètres, Monsieur, et ma *Mort de Paris*, deux cents hexamètres!

— Je reprends:

Donc le poète est vraiment voleur de feu.

Il est chargé de l'humanité, les *animaux* même; il devra faire sentir, palper, écouter ses inventions; si ce qu'il rapporte de *là-bas* a forme, il donne forme; si c'est informe, il donne de l'informe. Trouver une langue; — Du reste, toute parole étant idée, le temps d'un langage universel viendra! Il faut être académicien, — plus mort qu'un fossile, — pour parfaire un dictionnaire, de quelque langue que ce soit. Des faibles se mettraient à *penser* sur la première lettre de l'alphabet, qui pourraient vite ruer dans la folie!

Cette langue sera de l'âme pour l'âme, résumant tout, parfums, sons, couleurs, de la pensée accrochant la pensée et tirant. Le poète définirait la quantité d'inconnu s'éveillant en son temps dans l'âme universelle: il donnerait

plus — que la formule de sa pensée, que la notation de *sa marche au Progrès!* Énormité devenant norme, absorbée par tous, il serait vraiment *un multiplificateur de progrès!*

Cet avenir sera matérialiste, vous le voyez; — Toujours pleins du *Nombre* et de l'*Harmonie*, ces poèmes seront faits pour rester. — Au fond, ce serait encore un peu la Poésie grecque.

L'art éternel aurait ses fonctions, comme les poètes sont citoyens. La Poésie ne rythmera plus l'action; elle sera *en avant*.

Ces poètes seront! Quand sera brisé l'infini servage de la femme, quand elle vivra pour elle et par elle, l'homme, — jusqu'ici abominable, — lui ayant donné son renvoi, elle sera poète, elle aussi! La femme trouvera de l'inconnu! Ses mondes d'idée différeront-ils des nôtres? — Elle trouvera des choses étranges, insondables, repoussantes, délicieuses; nous les prendrons, nous les comprendrons.

En attendant, demandons aux *poètes du nouveau*, — idées et formes. Tous les habiles croiraient bientôt avoir satisfait à cette demande. — Ce n'est pas cela!

Les premiers romantiques ont été *voyants* sans trop bien s'en rendre compte: la culture de leurs âmes s'est commencée aux accidents: locomotives abandonnées, mais brûlantes, que prennent quelque temps les rails. — Lamartine est quelquefois voyant, mais étranglé par la forme vieille. — Hugo, *trop cabochard*, a bien du vu dans les derniers volumes: *Les Misérables* sont un vrai *poème*. J'ai *Les Chatiments* sous main; *Stella* donne à peu près la mesure de la *vue* de Hugo. Trop de Belmnotet et de Lamennais, de Jehovahs et de colonnes, vieilles énormités crevées.

Musset est quatorze fois exécration pour nous, générations douloureuses et prises de visions, — que sa paresse d'ange a insultées! O! les contes et les proverbes fadasses! ô les nuits! ô *Rolla*, ô *Namouna*, ô *la Coupe*! Tout est français, c'est-à-dire haïssable au suprême degré; français, pas parisien! Encore une œuvre de cet odieux génie qui a inspiré Rabelais, Voltaire, Jean La Fontaine! commenté par M. Taine! Printanier, l'esprit de Musset! Charmant, sont amour! En voilà, de la peinture à l'émail, de la poésie solide! On savourera longtemps la poésie *française*, mais en France. Tout garçon épicié est en mesure de débobiner une apostrophe Rollaque, tout séminariste en porte les cinq cents rimes dans le secret d'un carnet. A quinze ans, ces élans de passion mettent les jeunes en rut; à seize ans, ils se contentent déjà de les réciter avec *cœur*; à dix-huit ans, à dix-sept même, tout collégien qui a le moyen,

fait le Rolla, écrit un Rolla! Quelques-uns en meurent peut-être encore. Musset n'a rien su faire: il y avait des visions derrière la gaze des rideaux: il a fermé les yeux. Français, paradis, traîné de l'estaminet au pupitre de collège, le beau mort est, désormais, ne nous donnons même plus la peine de le réveiller par nos abominations!

Les seconds romantiques sont très *voyants*: Th. Gautier, Lec. de Lisle, Th. de Banville. Mais inspecter l'invisible et entendre l'inouï étant autre chose que reprendre l'esprit des choses mortes, Baudelaire est le premier voyant, roi des poètes, *un vrai Dieu*. Encore a-t-il vécu dans un milieu trop artiste; et la forme si vantée en lui est mesquine: les inventions d'inconnu réclament des formes nouvelles.

Rompue aux formes vieilles, parmi les innocents, A. Renaud, — a fait son Rolla; L. Grandet, — a fait son Rolla; — les gaulois et les Musset, G. Lafenestre, Coran, Cl. Popelin, Souly, L. Salles; les écoliers, Marc, Aicard, Theuriet; Les morts et les imbéciles, Autran, Barbier, L. Pichat, Lemoyne, les Deschamps, les Desessarts; les journalistes, L. Cladel, Robert Luzarches, X. de Ricard; les fantaisistes, C. Mendès; les bohèmes; les femmes; les talents, Léon Dierx, Sully-Prudhomme, Coppée, — la nouvelle école, dite parnassienne, a deux voyants, Albert Méral et Paul Verlaine, un vrai poète. — Voilà. — Ainsi je travaille à me rendre *voyant*. — Et finissons par un chant pieux.

ACCROUISSEMENTS

Bien tard, quand il se sent l'estomac éœuré,
Le frère Milotus, un œil à la lucarne
D'où le soleil, clair comme un chaudron récuré,
Lui darde une migraine et fait son regard darne,
Déplace dans les draps son ventre de curé.

Il se démène sous sa couverture grise
Et descend, ses genoux à son ventre tremblant,
Effaré comme un vieux qui mangerait sa prise;
Car il lui faut, le poing à l'anse d'un pot blanc,
A ses reins largement retrousser sa chemise!

Or, il s'est accroupi, frileux, les doigts de pied
Repliés, grelottant au clair soleil qui plaque

Des jaunes de brioche aux vitres de papier;
 Et le nez du bonhomme où s'allume la laque
 Renifle aux rayons, tel qu'un charnel polypier.

Le bonhomme mijote au feu, bras tordus, lippe
 Au ventre: il sent glisser ses cuisses dans le feu,
 Et ses chausses roussir, et s'éteindre sa pipe;
 Quelque chose comme un oiseau remue un peu
 A son ventre serein comme un monceau de tripe!

Autour, dort un fouillis de meubles abrutis
 Dans des haillons de crasse et sur de sales ventres;
 Des escabeaux, crapauds étranges, sont blottis
 Aux coins noirs: des buffets ont des gueules de chantres
 Qu'entrouvre un sommeil plein d'horribles appétits.

L'écœurante chaleur gorge la chambre étroite;
 Le cerveau du bonhomme est bourré de chiffons.
 Il écoute les poils pousser dans sa peau moite,
 Et, parfois, en hoquets fort gravement buffons
 S'échappe, secouant son escabeau qui boite...

Et le soir, aux rayons de lune, qui lui front
 Aux contours du cul des bavures de lumière,
 Une ombre avec détails s'accroupit, sur un fond
 De neige rose ainsi qu'une rose trémière...
 Fantasque, un nez poursuit Vénus au ciel profond.

Vous seriez exécration de ne pas répondre: vite, car dans huit jours, je serai à Paris, peut-être.

Au revoir,

A. RIMBAUD.

Monsieur Paul Demeny,
 À Douai.

シャルルヴィル, 一八七一年五月十五日

僕は貴方に一時間ばかり新しい文学について語る決心をしました。まず時局むきの聖なる詩篇からはじめます――

パリの戦争の唄

「春」が来たのは明瞭だ、なぜならば
緑の「所有地」の心臓部からの、
ティエールとピカールの飛び道具が
全開の華々しさを誇っておるゆえ

ああ「五月」よ！ 何という気違いじみた破廉恥漢どもだ！
セーヴル、ムードン、バニユウ、アスニエールの地よ、
さあお客さんたちの撒き散らす
春向きのものの音を聴くがよい！
奴さんらは歩兵帽、サーベル、そして太鼓をもってござる、
古ローソク箱のランタンにあらずして、
はたまた赤く染った湖を、ぜんぜん……
かきわけたことのない、大型ボートにあらずして！

我方はかつてなかった大騒ぎ
特別製の朝焼けのとき
味方の巣窟に
黄色の飾り玉が炸裂するとき！

ティエールとピカールはヒーローでエロスでゼロである、
ヘリオトロープの誘拐者だ、
石油を使ってあいつらはコロームどきに空を焼く。
そして奴らの害虫部隊がこのこ進んでくるわけだ……

奴らに「荒仕事」はおなじみだ！……
あやめの生えた中に寝て、ファーヴルの奴は
まばたきをして空涙、
胡椒をかいで鼻をグスグス！

諸君のふりまく石油のシャワーにもかかわらず、
大都会の舗道は熱いぞ、
そして絶対に必要なんだ、おれたちが、

その任についた諸君らを奮起させることが……

それから長いことしゃがみ込んで
 勿体ぶった「田舎者」どもは、
 芽茶苦茶な真赤なものの中に
 小枝の折れる音を聞くだろう！

A. ランボオ

——以下は詩の未来に関する文章です——

すべての古代詩歌はギリシヤ詩、つまり「調和ある生活」に帰着する。ギリシヤからロマン主義運動まで——中世も含めて、——沢山の文学者、作詩家がいる。エンニウスからテロルドゥス、テロルドゥスからカジミール・ドラヴィーニューまで、すべては韻を踏んだ散文、遊び、無数の低能世代の衰頹と栄光の繰り返しである。ラシーヌは純粹で雄勁、偉大な存在である。——しかしその脚韻を吹き消し、その半句をかきまぜでもすれば、この「神聖なる馬鹿」は「〇〇起源論」の、誰でもいいような著者と同じ位今日では無名であったと思われる。——ラシーヌ以後遊戯には黴が生えている。それが二千年も続いたのである！

冗談でも逆説でもありません。理性のひらめきによって、僕はこの問題について「若きフランス」の一人が感じたどんな強い怒りより、更に強い確信をもっているのです。それにまた昔の人を憎悪するのは新人たちの自由です！自分のところにいてしかも暇があるというわけです。

ロマン主義はかつて正当な評価を受けたためしがない。誰がそれを判定したであろうか。批評家どもが!! ロマン派が? 彼等は歌というものが作品であること、つまり歌い手によってうたわれ、理解される思想であることがかくも稀であることを証明しているのである。

けだし、「我」とは一個の他人である。銅が目覚めたときラッパになっていたとしても、悪いのは銅ではない。このことは僕には明白です。僕は自分の思想の開花に臨んでいる。僕はそれを見つめ、それを聴く。僕が楽弓を一弾きすると、交響楽が奥深いところで鳴動しはじめ、あるいは一跳びに舞台におどり出て来る。

昔の馬鹿どもが、自我について誤った意味しか発見しなかったというような事さえなければ、我々はなにも幾百万もの骸骨どもを掃いて捨てる必要はないのである。はかり知れないほどの昔から、奴らのめっかちの知能の産物を、我こそが著者なりとどなりたてながら溜込んできた形骸どもを!

ギリシアでは、先にも言ったように、詩句と豎琴は「物語」に調子をつけるのである。以後、音楽と脚韻は遊戯であり、息抜きである。物好きが、こういう過去の研究に夢中になり、なかにはこういう古代文物を復活させて喜んでいるものがある——それはその連中にまかせておこう。普遍的叡知は常にその観念をごく自然に放出し、人間どもはこれら智

恵の木の実をひろい集めてきたのである。そして、それによって行動し、それを種にして本を書いたりしてきた。人間は努めるという事をせず、未だ目覚めていない、というよりは大きいなる夢想の飽和点に達していなかったの、事はそういう具合に運んだのである。役人、著述家は存在する、しかし作家、創作家、詩人、こういった人間は決して存在しなかったのである！

詩人たらんと志す人間の第一の修練は、彼自身の認識、全的な認識である。その者は己れの魂を探求し、検査し、試練にかけ、識るのである。己が魂を識れば直ちにそれを耕さねばならない。それは簡単のように見える。どの頭脳の中でも自然な発展というものなされるのであるから。作家と自称する自分勝手な連中は大勢いるし、他にも沢山、自らの知的な進歩を己れ自身の力に帰しているのが沢山いる！——しかし要は、怪物的な魂を作り上げることである。コンプラキコス流にである！顔の上に疣を植えてそれを栽培している男のことを想像してみるがよい。

見者であらねばならぬ、自らを見者たらしめねばならぬのである。

「詩人」は、あらゆる感覚の、長期にわたる、廣大無辺でしかも理に即した錯乱により、見者となる。あらゆる形の愛、苦悶、狂気——彼は自らを探求し、己れの中にあらゆる毒を汲み尽し、その精髓のみをとるのである。苦痛は言いようのないほどのものであり、全き信条と超人間的な力がなければ出来ないことなのであるが、そのようにして彼は、なかなか偉大な病者、偉大な罪人、偉大な呪われ人となり、——そして至高の「学者」となるのだ！——何故なら彼は未知に達するからだ！すなわち、もともと誰よりも豊かなその魂を耕したからである！彼は未知に達し、そして狂乱のあまり、遂に彼の見るものについての知覚を失ったとき、彼はそれらのものを見たのである！聞いたこともないもの、名づけようもないものに接し、跳ねとんでくたばるがよい。他の恐るべき労働者らがやってくるだろう。彼等は先達が斃れた地平線から手をつけるのだ！

——続きは六分後に——

ここに僕は本文以外の第二の聖なる詩篇を挿入します。どうぞ御好意をもってお聞き下さい、——誰も皆うっとりするはず。——楽弓を手に、さあ始めます。

おれの可愛い恋人ども

涙の蒸溜香水が洗い流す

キャベツ緑の空の色。

よだれをたらす若木の下で、

特製の尻の

おまえたちの白いゴムに

丸いあざ、

膝をガタガタ打ちあわせろ

おれのブス公！

あの頃おれたちは互いに好きだった、
青い髪のスス公！
半熟卵を食ったもんさ
それにハコベも食ったもんさ！

ある夜、おまえはありがたくもかしこくもおれを詩人と言ってくれた、
金髪のスス公。
こっちへ来い膝にのせて
叩いてやる。

おれはおまえの髪^{バンドリンス}油を吐いちゃった、
黒髪のスス公。
おまえはおれのマンドリンの
弦を切っちゃまうだろう。

おー厭だ！栗色の髪のスス公、
かわいたおれのつばが、
いまだにおまえの丸々した胸の
谷間を汚している！

ああおれの可愛い恋人ども、
おれはおまえらが大好きだ！
おまえらのキタナイ乳を
レースで隠せ！

おれの感傷の古い壺を
ふみにじれ。
——そーら！おれのためにしばらくの間
バレリーナになってくれ！……

おまえたちの肩甲骨はずれているぞ、
ああおれの恋人たち！
びっこをひくおまえの腰に一つの星、
ぐるぐるまわれ！

だけでもおれが韻を踏んだのは

こういう羊の肩のためなんだ!
おまえたちの腰をくぐりてやりたい
愛した科で!

出来そこないのスターどもの色あせた堆積
隔の方を埋めてろ!
——おまえたちはおぞましい心配事に打ちひしがれて
神の裡にくたばるだろう!

丸いあざのついた
特製の月の下で、
膝をガタガタ打ちあわせろ、
おれのブスども!

A. R.

以上。ところで、六十サンティーム以上の切手代をあなたに払わさせる事を意に介しないなら——私、おびえた貧乏人は、ここ七カ月というもの、一枚の銅貨も手にしたことがないありさまです! ——この他に更に、僕の「パリの恋人たち」十二音綴百行と「パリの死」十二音綴二百行をお送りするのですが! ——

話を元にもどします。

従って詩人はまさしく火を盗むものである。彼は人類に、さらに動物たちにさえも責を負っているのであって、己の発明したものを嗅がせ、触れさせ、聞かせなければならないだろう。彼方から彼が持ち来るものに形があれば形を、形がなければ不定形を与えるのである。一つの言語を見出すことである。

——それに、あらゆる言葉は観念であるからには、普遍言語の時代が来るだろう! それはどういう言葉であれ、その辞書を完璧にするには、アカデミー会員——化石よりも死んだ——でもなければならぬだろう。弱い連中が、アルファベットの最初の文字について考え始めたとする、彼らはあつというまに狂気におちいるかもしれない! ——

この言語は、魂から魂にかけて存在して、香りも、音も、色彩も、あらゆるものを要約し、思索から思索を鉤でひっ掛け、引き寄せるだろう。詩人は普遍的魂の中に、彼の時代に目覚めている未知の量を明示することになるだろう。彼は自己の思想の公式や、「進歩」にいたる歩みの注釈以上のものを提出するだろう。度外れたことが万人に吸収されて尺度となり、詩人は真の意味で一つの進歩の乗数となるだろう!

このような未来は物質主義的なものであるだろうことは御明察のとおり。——常に「数」と「諧調」に充ち満ちて、これらの詩は永く残るものとして作られるだろう。——しかし結局は、それもなお幾分かは「ギリシャの詩」であるかも知れない。

詩人たちが市民であるように、永遠の芸術もその職分を持つだろう。「詩」はもはや物

語に調子をつけることはせず、前進するだろう。

かかる詩人が出現するのだ！女性のはてしもない隷属が打ち毀されたとき、男性は——それまでは忌むべき存在であったのだが——女性にひまを出し、女が自らのために、自らの力で生きるであろうとき、女は詩人となる、女もまた！女は未知を発見するだろう！彼女らの思弁の世界は我々のものとは違っているだろうか？——女は不思議なもの、はかり知れないもの、気味のわるいもの、甘美なものを発見するだろうし、我々はそれを取り上げ理解するだろう。

それまでの間は詩人たちに新しきもの——思想と形式を求めよう。すべて器用な連中はすぐに、この要求を充たしたと思うことだろう。——だがそうじゃないんだ！

初期のロマン派たちは見者とは何かあまりよく解らないままに見者であった。彼等が魂を耕すことは偶然始められたのである。うち棄てられたがまだ燃えているので、しばらくはレールの上を走る機関車のようなものである。——ラマルティエヌはときには見者であった、しかし古い形式に首を締められている。——コゴーは、あまりにも頑固であるが、最近の著書には多くの見られたものがある。『レ・ミゼラブル』は真の詩である。僕は手許に『懲罰詩集』をもっているが、その中の一篇「ステラ」は、ほぼユゴーにおける見られたものの限界を示している。ベルモンテ、ラムネ、エホヴァそれから柱列など、古くさい、くたばったような壮大さがあすぎるのだ。

ミュッセは我々苦悩にみち、幻想に憑かれた世代にとっては十四倍も憎悪すべき存在であって、——彼の天使のような怠惰はわれわれの世代を侮辱しているのである！ああ、気の抜けた例のコントに諺喜劇！ああ、数々の「夜」よ！ああ「ロラ」よ、ああ「ナムーナ」よ、ああ「酒盃」よ！どれもこれもがフランス的だ、すなわち極度に厭わしい、フランス的であって、パリ風ではないのだ！これもまたラブレー、ヴォルテール、ジャン・ラ・フォンテーヌに靈感を吹き込み、テーヌ氏によって能書きをつけられた、あのおぞましい精霊の生み出した作品なのである！春向きなんだ、ミュッセの精神は！うっとりさせてくれるんだ、彼の恋は！これこそまさに七宝細工の絵であり、長続きのする詩なのだ！人々は末長くフランス詩なるものを味わうことだろうが、それはフランスの中だけの話なのだ。どんな食糧品屋の小僧でもロラ風の頓呼法をひねり出すことはできるし、どんな神学校の生徒でも手帳にこっそりと五百行ぐらいいはもち歩いているものだ。十五歳ともなればこうした情熱の高揚で若い者にさかりが付き、十六歳になれば、彼等はもうそういうものを心をこめて朗唱していい気持になり、十八歳には、いや十七歳でもう、詩をつくるすべを知っている学生は皆「ロラ」を気どり、「ロラ」の一つくらいは書いてみせる！中には、そのためになら死んでみせるのが今もなおいることだろう。ミュッセは何ひとつ創り出す力がなかった。紗のカーテンの向うに幻影があったが、彼は目をつぶってしまったのである。フランス的で、気取り屋で、居酒屋から学校の机へとうろついた、美男の屍は死んでしまったのだ、我々は憎悪でもってやつをわざわざ呼びさますことのないようにしよう！

第二期のロマン派はきわめて見者である。Th. ゴーチエ, Lec. ド・リール, Th. ド・

バンヴィル。しかし目に見えぬものを検討し、未聞のものを聞くことは、死物の精神を蘇えらせることとは別のことであって、ポオドレールこそは第一の見者、詩人たちの王、真の神なのである。ただ彼は、やはりあまりにも芸術家風の環境に生活していた。そして彼においてあれほど称揚される形式も貧弱なものである。未知の発明には新しい様々な形式が必要とされるのである。

古い形式をとる、無邪気な連中の中では、A. ルノー——彼は自分の「ロラ」をつくった——L. グランデ、——彼もまたその「ロラ」を書いた。——ゴール人氣質でミュッセ流の連中は、G. ラフネートル、コラン、Cl. ポプラン、スーラリ、L. サール。生徒さん方は、マルク、エカール、トーリエ。死物に白痴連中は、オートラン、バルビエ、L. ピンジャ、ルモワヌ、デシャン兄弟、デゼサール父子。ジャーナリスト連は、L. クラデル、ロベール・リュザルシュ、X. ド・リカール。気まぐれ派は、C. マンデス。放浪派；女流詩人、才人連は、レオン・ディエールとシュリ＝プリュドンム、コペ。——これ以外に高踏派と呼ばれる新しい流派には二人の見者がいる。アルベール・メラと真の詩人、ポオル・ヴェルレーヌである。——以上。かくて僕は自分を見者たらしめんと努力しています。——では最後に敬虔な歌でしめくくりましょう。

しゃがむ

朝も遅く、胃の腑に吐き気をもよおす頃おい、
 修道士ミロテュス殿は、天窗を片眼で見やる
 そこからはお日様が、ピカピカに磨かれた銅鍋のように明るく、
 彼を頭痛の投槍で刺し、目をくらくらさせるので、
 彼はシーツの中で、その司祭風の布袋腹の位置を変える。
 灰色のふとんかけの下でばたばたごそごそ
 それからやっとベッドを降りる、膝はぶるんぶるんの腹につけ、
 嗅ぎタバコの一つまみを食ってしまう年寄のようにうろたえて、
 何故なら白い壺の取手を握み、
 シャツをたっぷり腰までまくりあげねばならぬからだ！

さて、彼はしゃがみ込んだ、寒がりなんだ、足の指を
 ちぢこめて、窓に貼った紙をブリオシュの皮みたいに
 黄ばませる太陽の下でガタガタ震えながら。
 それから奴さんの鼻は、ラッカーのようにテカテカ光っていて
 光線の中でひくひく、まるで肉のサンゴだ。

こいつは火でトトロ煮られているといった格向、腕は曲がり、下唇は
 腹にくっつき。腿が火の中にすべり込みそう。

そして股引がきつね色にこげ、パイプが消えるのを感じる。
うず高いはらわたの山のような今や晴々サッパリした腹のあたりで
何ぞ小鳥のようなものが一寸蠢動する!

そのまわりでは、垢じみたぼろの間、ふくらんだ床の上で
頭のボケた家具が乱雑にちらかって眠っている。
木の床几いや奇怪なひき蛙が、暗い片隈に
ひそみ隠れている。食器戸棚はすさまじい食欲に充満した眠りが
かすかに引きあける聖歌隊歌手の口をもっている。

胸がむかつくほどに暑気が狭苦しい部屋に満ちている。
奴さんの脳髄にはぼろきれが詰っているのだ。
彼はそのじめっとした皮膚の中で毛がのびる音を聴く、
そしてときどき、キワメテ重々しくかつ滑稽な
しゃっくりと共に、ビッコをひく床几をゆすぶって思わず飛び出す……
……………

そして夜、月の光さすとき、その光は奴さんの
尻のまわりに光のしみをつくり出し、
ものの影が、バラ色の雪ともまごう背景に
タチアオイのようにしゃがみこむのが細かいところまで見える……
はて面妖な、鼻が一つ天の奥に明の明星を探している。

返事を下さらないようでしたら、あなたはひどい人ですよ。すぐ下さい。一週間後には、
僕はパリに行ってるかも知れませんので。

さようなら、

A. ランボオ

在ドゥエ

ポオル・ドメニイ様

III. 書簡原稿の再発見とその公刊

i) 五月(十三日)付, Izambard 宛

一九一一年になって Izambard 自身によって原稿が再発見され *La Revue européenne*
一九二六年十月号に発表される。

現在, Charleville の Musée Rimbaud に写真版の複製が保存されている。

原稿の状態については Georges Izambard: *Rimbaud tel que je l'ai connu* (Mercure

de France 1947, réédition 1963-p. 134) に詳しく書かれている。この (十三日) という日付が後に重要となるので、その Izambard による原稿の描写を記しておこう。

手紙には一八七一年五月の日付がある。五月の何日であるのか、Rimbaud は書き落しているが、それは郵便のスタンプで次のようであることがわかる。五月十三日、Charleville 発、一八七一年五月十五日 Douai 着。切手は貼ってなく、太く 30 という数字が書かれている。受け取るのに三十センチメートルを要したのである。

封筒なし。手紙は、折って簡単に封蝋をつけられている。従って郵便のスタンプは手紙の三枚めの原稿、八行詩の書かれている部分の裏に捺されている。

ii) 五月十五日, Paul Demeny 宛

自筆原稿は Alfred Saffrey コレクションにあり。

Berrichon によって *La Nouvelle Revue Française* 一九一二年十月号に発表。

自筆原稿の写真複製が一九一四年に Messein から出ている。

(以下次号)

注

- 1) これら二通の手紙の翻訳に際し次の諸氏の注釈および翻訳に負うところが多い。Suzanne Bernad (Garnier 版) Antoine Adam (Pléiade 新版), 平井啓之 (筑摩書房版世界文学大系 43), 中村徳泰 (『ランボー全集』雪華社) 栗津則雄 (『ランボオ全作品集』思潮社) 殊に手紙の中に挿入された詩中の意味不明の語については Adam の意見を参考にすることが多かった。
- 2) ところで Izambard は一八七一年五月の五、六、七のいずれかの日に、別にもう一通、ランボオから手紙を貰ったと後になって思い込んでいた。それは Izambard によれば、彼がこれまで Rimbaud から受け取った中でも「最も珍しく、もっとも啓示にとむ手紙」であったという。この『失われた手紙』に関して Octave Nadal が論文を書き (O. Nadal: *A propos d'une lettre «égérée» de Rimbaud à G. Izambard, Revue d'histoire littéraire*, avril-juin 1951) それが Izambard の思い違いであつてもともとその手紙は存在しなかったことを証明している。何故こうしたカン違いが生じたか。それについては IV. を参照。